玉川教会たより

NO,458

6月15日

賀川ハルと村岡花子

▼NHKの所謂朝ドラ『花子とアン』の主人公・村岡花子と、賀川ハルとが繋がりだということを、つい最近まで知らなかった。系図で見ると、賀川ハルの従弟の妻が村岡花子になる。血縁こそないものの、ごく近い姻戚関係だ。

▼それこそ、『花子とアン』を観るまで、花子が極貧と言っても外れでないような、小作農家の出とは知らなかったし、ハルの生い立ちも知らなかった。この二人の共通点に、驚きを超えて、何か神秘的なものさえ感じた。

▼『賀川ハルものがたり』の帯には、「たんぽぽのように生きる」と記されている。もう少し引用すると、「伝道者・賀川豊彦と出会い、神の愛を知った女工ハル。やがて結婚した豊彦の社会事業を支え、自らも隣人に仕える生き方をつらぬくことで、ハルはしっかりと地に根を張り、花を咲かせていった」

▼賀川ハルを「たんぽぽのように」と形容したのは、編集者の慧眼だ。そこから、「蒔かれた種の響え」を連想させられた。二人ともに、大きな可能性を秘めた種だった。しかし、蒔かれた土地は条件の良い所ではなかった。その土地から、風に吹かれるようにして、飛ばされ、良い土地に巡り会った。このことも、二人に共通している。

▼飛ばされて辿り着いた先は、花子の場合はミッションスクールであり、ハルの場合は教会であり、その場所でこそ与えられる人との出会いがあった。この風は、プニューマ＝聖霊だったのだろうか。

▼『賀川ハルものがたり』は、伝記の形を取っており、概ね年代順に出来事が記されている。しかし、元々の原稿は、『賀川ハル研究』であり、短い論文の集積だったと聞いた。その残滓と言ったら失礼か、名残が表面に出ている箇所があるように思う。少し硬い。文章にも、論文の臭いが残る。

▼しかし、結果的にこれが巧まざる効果を上げていると言えよう。『賀川ハル』の『ものがたり』、事実そのものに劇的な要素が強い。もし、歴史的事実ではなくて、ドラマだったら、嘘臭くてしらけてしまうかもしれない。これを、小説家の筆ではなく、学者、それも、若い研究者の眼と筆で記していることで、正に巧まざる効果が生まれているように思う。

▼著者は学生時代から、このテーマに取り組み、長年の研究を重ねて来たそうだから、たっぷりの思い入れが、当然あるだろう。そのことは充分読み取れる。そのまま筆が走って停まらなくなりそうな箇所もある。しかし、我慢して押さえたのだろう。良い案配にまとめられて、読みやすい。

▼『花子とアン』に印象的なセリフがあった。教師が花子に言う。「ハナさんには何もなくても、根拠のない自信だけがあるのね」。ハルと花子の時代、日本全体が貧しく何もなかった時代、若者には自信も根拠もなかった。しかし、希望と使命があった。この時代は痩せた土壌であっても、必ずしも悪い土地ではなかったのかもしれない。

▼翻って、今日の、日本、そして教会。この現状から、ハルや花子が生え出て来るだろうか。希望と可能性の豊かな種は、どこに落ちるのだろう。教会に落ちた種、或いは吹き飛ばされて来た種は、実りを迎えることが出来るだろうか。

▼感想文のようになってしまった。それだけ、面白いということ。

194－0041　町田市玉川学園4の5の32　℡. 042－732－9321